伊達政宗はいつ家督を継いだのか

―天正一二年（一五八四）一〇月一二日付政宗書状を手がかりに―

松尾剛次
（山形大学名誉教授）

はじめに　謎の提起

伊達政宗といえば、戦国・近世大名の一人で、大河ドラマ「独眼竜政宗」などで知られ、政宗研究は大いに盛んである。だが、謎も残されている。その謎の一つに家督をいつ継いだのかがある。実に政宗の家督継承という政宗の伝記研究の基本事項中の基本ともいうべき事柄が明白ではない。そこで本稿では、その点に焦点を絞って論じてみる。

もっとも、家督継承の、おおよその時期は明らかにされている。従来の問題に関する基本的な考えは、伊達藩の正史である『伊達治家記録一』[*1]によって、家督相続を天正一二年（一五八四）一〇月六日から二二日までの間の出来事とする[*2]。それは、天正一二年一〇月五日まで輝宗の家督としての文書が出されていることと、二三日には輝宗を隠居後の名である性山公と呼んでいることなどによる。基本的にそれは支持できるが、期日を特定できないのであろうか。以下、考察してみよう。

伊達政宗はいつ家督を継いだのか

第一章　小林清治説

この問題に関しては、『伊達治家記録一』以後、小林清治氏の研究[*3]がある。小林氏は、先の『伊達治家記録一』の編者の推定根拠を以下の二点の文書に求めている。

まず、天正一二年一〇月五日付で伊達輝宗が知行判物を出している[*4]ことを挙げ、その日までは輝宗が家督であったとする。すなわち、それが家督継承が一〇月六日以降であったとする『伊達治家記録一』編者の根拠と推定する。

また、同年と見られる一〇月二三日付の石川昭光宛政宗書状[*5]の中に輝宗を性山公という隠居名がみえること、またこの手紙が伊達家督として出されたことなどを挙げて[*6]、家督継承が一〇月二三日以前の出来事とする『伊達治家記録一』の論拠とする。

そこで、政宗が家督として最初に出したとされてきたこの一〇月二三日付の石川昭光宛政宗書状をみよう。

就御詫言之義、以別紙承候、具ニ令被見候、惣別手前へ知行之所領、一向無之候、然処ニ結句、隠居分ニ相除候条、弥々万不自在之躰ニ候、併年来承処、幾度も申払儀、如何之由存、乍少所今般進置候、於様躰者、屋薩ニ申含候、性山事者、兄弟之御間ニ候得共、御詫言合点不被申候処ニ、今度如此事、御塩味尤

ニ候、次ニ者南口唱、彼是以書付承候間、得其意候、毎事薩摩守口上ニ可有之候、恐々謹言

拾月廿三日　政宗御書判

（現代語訳）

御詫言については、別の手紙で承りました。詳しく拝見いたしました。概して、私が知行する所領は全くありません。それなのに、結句、隠居分を相除きましたので、ますます、よろず自由にならない状況です。しかしながら、数年来承っていることで、幾度も願いを却下するのはいかがかなものかと思い、少ない所ですが、この度与えます。状況については屋薩（矢吹薩摩守）に申し含めております。性山（伊達輝宗）は兄弟の間柄ですが、御詫言に合点がいかないとのことで、この度このような御配慮はもっともなことです。次に南口のこと、彼これ書面をもって承りましたので、了解しました。毎事、薩摩守が口上で申すでしょう。恐々謹言

十月二十三日　政宗花押

内容から、この一〇月二三日付の政宗書状は、伊達輝宗の隠居（性山は隠居後の名）を受けて、石川が出した詫言に対する返書で、政宗は少々ながらも土地を与えている。

小林氏は、その詫言は、二三日以前に来たはずである。とすれば、米沢・石川間往復二〇〇キロを往来するのに、二・三日は要したはずとして、一〇月二〇日までには家督継承は実現していたとする[*7]。それゆえ、輝宗から政宗への家督継承は、一〇月六日以降一〇月二〇日までには進められたとする。

以上のように、小林説は、『伊達治家記録一』説を一歩進めて、家督継承は、一〇月六日以降一〇月二〇日までには進められたと考えている。この説が、現在の通説といえる。

第二章　最上義光宛伊達政宗書状

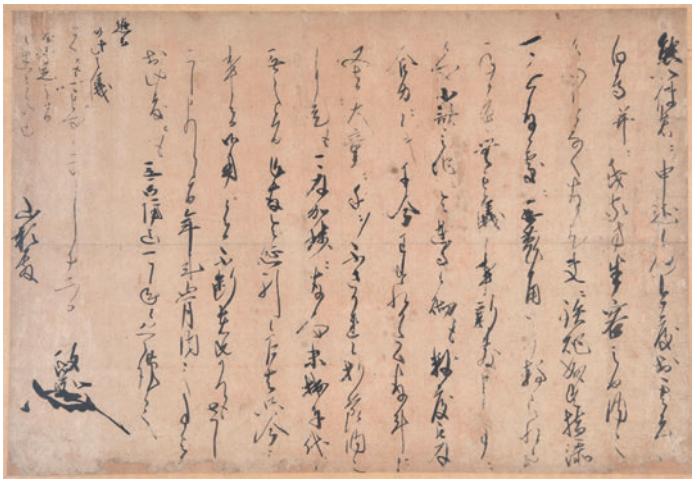
こうした先行研究の成果は大いに示唆に富んでいるが、従来、まったく注目されてこなかった最上義光宛伊達政宗書状に注目することで家督継承時期を確定したい。すなわち、次頁に写真をあげた兵庫県立歴史博物館所蔵の天正一二年（一五八四）某月一二日付最上義光宛伊達政宗書状[*8]である。

この書状は、すでに二〇〇五年には武田喜八郎氏によって紹介されている[*9]。武田氏は、年付もなく、月の部分も摺り消えてはっきりしない[*10]が、六月一二日付のものとする。

というのは、後述のように、その手紙が天正一二年六月七日に殺された白鳥長久殺害事件を伝えていることと、「未拙子代ニ無之候」

（まだ私は家督ではなかったので）とあることから、その手紙は伊達政宗が家督継承以前の文書と考えられたことによる。果たして、そうした理解は正しいのであろうか。検討してみよう。

まず、写真を挙げて、翻刻し、主要部を現代語訳しておく。なお写真は、兵庫県立歴史博物館から提供された。その際、前田徹氏にお世話になった。



（翻刻）

態以使者ヲ申述候、仍今度於其元、」白鳥〈長久〉并ニ氏家方生客之由、内々」御心もとなく存候て、使ニ鉄砲成共指添、」可進存候処ニ、無菟角とり静られ候由、」承候条、無其儀候、事新敷申候事ニ」候へ共、小斎之地ニ令連馬候砌ニも、数度被及」合力ニ候キ、于今わすれかたく存計ニ候、」又者天童ニ手ヲふさかれ候折節、内々」自是も可及加勢ニ存候へ共、未拙子代ニハ」無之候間、乍存令延引候、乍去只今ニ」事候者、御用ニ候者、不断者共にても、さし」こし申へく候間、年来骨肉之事与云、」於此度ニも、無御隔意、可承候、恐々謹言、

（奥上追書）

追而、」如此之儀、」とくニも可申候へ共、」無必定之間、」令遅々候、

以上、

拾〈カ〉月十二日　政宗（花押）

山形殿（最上義光）

（現代語訳）

わざわざ使者を遣わして申し述べます。さて、①白鳥長久ならびに氏家が殺害されたとのことを聞き、内々に心配しておりました。

使いに鉄炮などを差し添えて、そちらに派遣したく思っておりましたが、あれこれなく無事に静められたと聞き、そうしませんでした。事改めて申すまでもないことですが、②小斎（宮城県伊具郡丸森町）を攻めました際にも数度加勢されました。今でも忘れ難く思っております。また、天童攻めで手いっぱいの時は、こちらからも加勢に及ぼうと思いましたが、③まだ私は家督ではなかったので、心では思いながらも延引しました。しかしながら、④唯今には、事が起こって、御用があるようでしたら、不断の者（忠義の者）どもを、差し越しますので、これまで親類であることといい、この度にも、御遠慮なく承けたまります。

本書状では、武田氏がすでに指摘したように、第一行目に天正一二年六月七日に義光によって殺された白鳥長久の殺害事件に言及している。白鳥は、戦国時代の出羽武将で、谷地城主であった。織田信長を騙して出羽守に任じられたが、義光の申し出により、それが偽りであったこと明らかとなった。そのため、信長は白鳥殺害を義光に命じ、天正一二年六月七日に義光によって殺害された[*11]。

しかし、本書状によれば、「あれこれなく無事に静められた」と書かれている。白鳥殺害事件の収拾は、六月二八日に寒河江高基殺害で終わる寒河江討伐[*12]にまでかかっているので、六月一二日段階では終わっていない。それゆえ、六月一二日の書状とは考えがたい。

また、傍線部③の「まだ私は家督ではなかった」というように、伊達政宗が家督継承以前とおぼしき文言もあるが、その文言は、「天童攻めで手いっぱいの時は、こちらからも加勢に及ぼうと思いましたが、まだ私は家督ではなかったので、心では思いながらも延引しました」とあるように、義光が天童攻めに手こずっていた時と過去の話として記されている。

義光が天童攻めを行っていた時期は、天正一二年一〇月のことで、結局、同月一〇日には天童頼久は国分氏を頼って逃亡した[*13]。とすれば、本書状は天童氏討伐が終わった一〇月一〇日以降のもので、一〇月一二日付けであろう[*14]。

とりわけ重要なのは、傍線部④のように、唯今以降はこれまでと相違して、軍事的な援助を行うことを述べている点である。まさに、家督の専決事項である軍事指揮権を握ったことが伝えられている。とりわけ、傍線部④のように「唯今」と強調していることからすれば、まさに今、家督継承が決まったのであろう。

また、本書状からは、伊達政宗の初陣であった天正九（一五八一）年五月の小斎（現在の宮城県伊具郡丸森町）の戦いに、態々、最上義光が数度も加勢していたという事実も明らかと

なった。義光と政宗の関係は、天正一四年（一五八六）以後は悪化していくが、その頃は良い関係にあったのである。

以上の内容分析から、本書状は天正一二年一〇月一二日付けの文書と考えられる。とりわけ「唯今」という文言から判断すれば、政宗が一〇月一二付けで家督継承が決定した直後の文書となる。

おわりに

以上、天正一二年（一五八四）一〇月一二日付最上義光宛伊達政宗書状の分析から伊達政宗家督継承時期について確定した。最後に、伊達輝宗がなぜ一八歳の政宗に家督を譲ったのかについて述べよう。小林氏は、天正一二年（一五八四）一〇月六日に、会津領主蘆名盛隆が家臣に殺害されると、輝宗は生後僅か一ヶ月で当主となった盛隆の子・亀王丸の後見となった。その際、輝宗は盛隆の跡目に息子の小次郎を入れようとしたが、佐竹氏の反対で失敗した。このため、輝宗はこれを期に政宗に伊達家の家督を譲ることを決めたとする[*15]。七日前の蘆名盛隆横死と息子の入嗣工作失敗が契機となったのかははっきりしないが、輝宗は自分が元気な内に政宗の家督継承を決めようとしたのは確かであろう。天文の乱と呼ばれる祖父稙宗と父晴宗との壮絶な親子争いを見ていた輝宗は、当時とすれば成人年齢であった一八歳の政宗に家督を譲って、祖父・父の轍を踏まないようにしたかったのであろう。

付記　本稿作成に際し、佐藤憲一氏と兵庫県立歴史博物館の前田徹氏と最上義光歴史館の揚妻昭一郎氏にはお世話になったことを記して、感謝の意を表します。

注

*1 『伊達治家記録一』宝文堂出版、一九七二。

*2 『伊達治家記録一』〈前注（1）〉二七七頁。

*3 小林清治『伊達政宗の研究』吉川弘文館、二〇〇八、第三章参照。小林氏の研究は伊達政宗研究をリードしてきたが、近年では佐藤憲一氏の『伊達政宗謎解き散歩』（株式会社KADOKAWA、二〇一四）など新たな知見が提示されている。伊達政宗の花押については、石田悦夫「伊達政宗の花押変遷」『東北文化研究所紀要』一二、一九八一参照。

*4 小林『伊達政宗の研究』〈前注（3）〉二八頁。

*5 『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』仙台市、一九九四、五頁。

*6 小林『伊達政宗の研究』〈前注（3）〉二八頁。

*7 武田喜八郎「山形殿あての伊達政宗書状について」『羽陽文化』一四九、二〇〇五。

*8 『仙台市史資料編13伊達政宗文書4』仙台市、二〇〇七、二九八頁に翻刻、『仙台市史資料編13伊達政宗文書4別冊』仙台市、二〇〇七、一二八頁に写真あり。大きさは縦三四・二cm×横四九・七cm。現物は兵庫県立歴史博物館が所蔵。

*9 武田「山形殿あての伊達政宗書状について」〈前注（7）〉。

*10 月の部分の残画から六月とも読めないわけではないが、それは可能性の一つであり、本文で論じるように、内容分析から六月説は成り立たない。

*11 この白鳥長久誅殺事件については松尾『家康に天下を獲らせた男最上義光』柏書房、二〇一六を参照。

*12 松尾『最上氏三代』ミネルヴァ書房、二〇二二、五五頁。

*13 松尾『最上氏三代』〈前注（12）〉四六頁。

*14 月の部分の残画から推測すれば、「拾」月と書いてあったと考える。なお、伊達政宗は本文で扱った天正一二年一〇（拾と表記）月二三日付石川昭光宛書状（『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』〈前注（5）〉）でも、「拾月」を使っている。

*15 小林『伊達政宗の研究』〈前注（3）〉二八頁。小林『戦国大名伊達氏の研究』高志書院、二〇〇八、一三〇頁。

When did Date Masamune Succeed to the Head of his Clan? Based on Masamune's Letter Dated October 12, Tensho 12 (1584)

MATSUO Kenji

The aim of this paper is to clarify when Date Masamune became the head of his clan after Date Terumune. Using the *Date Jike Kiroku* I, the official history of the Date clan, earlier scholarship has been able to determine that this took place sometime between October 6 and 22 in 1584 (Tensho 12). On the basis of a letter that I have deciphered written by Date Masamune to Mogami Yoshiaki dated October 12, Tensho 12 (1584), I have been able to determine that the succession took place on October 12, Tensho 12 .